

3 自己評価結果		※ 評価は4点満点 4~3.4 達成している【85%以上】 3.3~2.8 おおむね達成している【70%以上85%未満】 2.7~2.0 あまり達成していない【50%以上70%未満】 2.0以下 達成していない【50%未満】					
分野・領域	評価項目(取組内容)	22年度 評価	23年度 評価	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	24年度 評価	25年度へ 改善の方策
教育活動	「確かな学力」の定着 生徒の実態を的確に把握し、個別指導やグループ指導、繰り返し指導などを充実させて、基礎的・基本的な学力及び知識・技能の定着を図る。	3	3.1	○範囲を決めた小テストを継続し、小さな成功体験を重ねることで、学習に対する自信や達成感をもたせたい。 ○基礎基本と質の高い課題の設定を関連させ、知識の活用と思考力・判断力・表現力の育成を図る。 ○学力の定着と向上について家庭学習の充実を図る。	○小テスト・ノートなどの日々の継続した学習習慣の定着を奨励し、基礎基本を大切にしたい指導を実施した。 ○個別指導・班指導と学習形態を柔軟にとり、個人としても、集団としても質の高い学びを目指し、学習指導を行っている。	3.1	○繰り返し学習などの指導方法を工夫し、定期的な小テスト・学習ノートの継続して行い、確かな学力の定着を促進する。 ○課題の量・内容・その評価方法について学習意欲を高められるものを精選、整理し、研修によって理解を深める。
	「思考力・判断力」の育成 コミュニケーションによる思考を育む授業を行い、主体的に学びを深める生徒の育成に努める。	3	3.1	○目標の工夫で学習意欲を高め、自立した学習集団をめざす。 ○自ら他者とかわる力を伸ばす取組を進める。 ○話し合いが活発になるように、課題設定、発問、教師の助言の工夫をする。	○学級内で、自分の意見を発表する場を設け、他者理解と意見交換の促進に努めた。 ○協同的な学習課題を設定し、問題解決学習を意図した授業を展開した。 ○集団としての学び合いの大切さに気づかせることができていた。	3.2	○学習者が自分の考えを持ち、その考えを伝える場を授業で数多く取り入れる。さらに、その「考え」方の根拠を論理的に説明できるよう指導する。 ○認め合い、高め合える学習集団として人間関係を構築させる。
	言語能力の育成 言語活動を教科に位置づけた指導を工夫する。	*	3.2	○書く、話す、説明するなど、教科のねらいを達成するための言語活動を場に応じて積極的に取り入れる。 ○言葉や多様な表現方法について指導する。	○各教科の年間指導計画の中に、言語活動を明確に位置づけたことで、意図的に授業で取り入れることができた。 ○グループ学習の形態を生かし、対話や討論等の言語活動を積極的に取り入れることができた。しかし、話し合いが必要となる話し方・聞き方等のスキルが十分に定着していない。	3.3	○記録・説明・要約・論述等の言語活動を行う上で必要となる言語スキルを習得するための時間を設定し、言語能力のより効果的な育成を目指す。 ○国語科で身につけた言語スキルが活かされるように他教科でも関連づけた指導を行う。
	ICTの活用 ICT教材を十分に利用し、学習意欲の向上など、効果的・効率的な授業に努め生徒の「学び」の活性化を図る。	*	3.2	○黒板と電子黒板の両方をうまく活用する方法を考え、学習意欲を高める工夫をする。 ○ノートのシェアや意見の交換に活用したり、授業のポイントを表示したりする。	○デジタル教科書、パワーポイント、ビデオなどICT教材を活用した授業が定着した。 ○生徒のコミュニケーション活動を活性化させるICTの利用について実践することができたが、生徒のICT利用については、これからの課題である。 ○ICTを利用し、グラフなど非連続型テキストを読み取らせるなど多角的に学びを深めさせることを意識して授業構成ができた。	3.4	○ICT機器を活用した授業の取組をいっそう進めるとともにICT機器活用の効果を検証する。 ○生徒にICT機器の活用をすすめ、プレゼンテーション能力を高めることにも、論理的に考えを伝える活動を行う。
	家庭学習の指導 家庭学習の手引きなどを活用して、生徒の自主的・自発的な学習の充実を図る。	*	2.8	○学習状況調査の実施、学習内容の点検など、指導による変化を把握し、活用していく。 ○自主的な学習を促す工夫をしたり、自主性・自発性の大切さを伝えたりする。 ○学習の手引きを繰り返し活用する。	○定期テストなどで、学習計画を立てさせ、計画的に学習に向かわせることができていた。 ○学習の手引きで、学習のポイント・コツなどを話し合わせた。互いに自分との類似点・相違点を発見し、話し合うことで学習方法の視野を広げることができた。 ○課題の出し方を研究し、家庭学習の定着と充実を奨励した。結果、提出物などの提出率や内容が徐々に向上してきている。	2.7	○家庭学習の進度・深化など、個々の学習者の状況を把握し、継続して取組ませる。 ○学習アンケートなどで実態を把握し、学習者自身にも現状を意識させる。 ○学習ノートを取り入れ、予習・復習が定着するような課題を出す。 ○学習の手引きをもとに、望ましい学習習慣・生活習慣についても一緒に考える機会をもつ。
	道徳教育 生徒の実態をふまえ、適切な主題設定を行い、より価値を深める学習を実践していく。	3	2.6	○実態や状況に応じた指導と計画的な指導の両立を行う。また、育てたい力を明らかにし、適切な教材を計画的に配置し、実践する。 ○進路指導の内容を取り入れる。 ○学校全体での指導計画を修正していく。 ○学校生活全般をとおして、道徳心を浸透させるように多角的に題材を組み立てる。	○各学年で3年間を意図した系統的指導計画を作成し、充実した指導ができた。 ○道徳の授業を通して、積極的に自己を振り返らせる機会を設けることができた。また、他者との違いに気づき、相互理解を深め、自他を尊重する態度を育成した。 ○学習集団の現状に柔軟に合わせて学習課題を設定し、考えを深めさせることができた。	2.9	○学校生活全体の向上を意図させる課題を取入れ、話し合わせる。 ○研修・研究会に参加し、校内でも研究授業を実施し、指導力の向上に努める。 ○進路指導や生徒指導との連携を考慮し、課題設定・指導方法を研修していく。学校全体で、共通理解を図り、目指す生徒像を意図して授業を実施する。
	人権教育 全教育活動を通じて人権意識を高め、人権感覚の備わった生徒の育成に努める。	3	2.8	○道徳・同和・人権の関連を整理して、3年間でのどのようなかをにつけさせるのかを明らかにする。 ○校内でのいたづらなどに教師が敏感に気づき指導する。 ○教師が学ぶ研修会を計画する。	○休み時間等も生徒と共に過ごし、生徒一人ひとりの喜動を把握した。また、学年会議などで共通理解を図った。 ○学年の生徒指導上の問題点をふまえて、授業の題材を選択した。	3.1	○本校が目指す人権教育を全職員が共通理解をして取り組む。 ○より良い授業を展開するため、人権問題を扱った使用教材をファイルし、指導上の工夫などを明記して次年度に申し送る。

分野・領域	評価項目（取組内容）	22年度 評価	23年度 評価	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	25年度へ 改善の方策	
教育活動	特別活動・学校行事 生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画し、自主的・実践的な態度を育てるとともに、学級、学年、縦割りグループ、全校などの様々な集団を構成する中で、目標に向かって努力し達成する喜びを味わわせる。	3	3.3	○教師が指導する領域と生徒に任せる領域について、職員の間で理解を深める。 ○学校行事・生徒会行事とも意識の向上を図り、自分たちが主体であるという自信をもたせる。 ○本部役員や専門部長だけでなく、一般の生徒の活動も、日常的に行わせる。 OPDCAサイクルを有効に活用して、よりよい活動にしていく。	○生徒会役員が新しい取組を考案し、役員を中心として生徒主体の活動を進められた。その結果、生徒たちに達成感を味わわせることができた。 ○行事の後は振り返りを行い、次年度に申し送ることができた。	3.4	○生徒主体で学校行事を進めていけるように、教師側の生徒へのサポート体制を整える。そのために、話し合いや会議を密に行う。 ○生徒の意識の向上を図り、全生徒が日常的に活動できる機会を設ける。 OPDCAサイクルを有効に活用して、よりよい活動にしていく。
	キャリア教育 生徒が将来の夢や目標に向かって、キャリア形成ができるように、特別活動等において適切な指導をおこなう。	*	2.8	○3年間を見通した系統性のあるキャリア教育年間指導計画を作成する。 ○日頃の行事や学習をキャリア教育の視点から捉え直し、キャリア発達を意図させた学習を設定する。	○「総合選択授業」では、ポスターセッションを行い、各講座での学習内容を共有した。また、その活動をおしてプレゼンテーション能力や自分の考えをまとめて提案する力を育成することができた。 ○総合学習の時間に、各学年で「アントレプレナー教育」を行い、課題に気づき、創造する力を育むとともに職業に対する生徒の意識を高めることができた。 ○キャリア教育について冊子にまとめることができた。	3.3	○平成24年度の取組をふまえて、教材を有効に活用し、さらにステップアップさせて次年度の計画を立てる。 ○教科指導においても、キャリア発達を意図した指導を行う。
	情報教育 教育機器をうまく活用しながら、教育効果を上げるような努力をしていくとともに、情報社会に適正に参画する態度（ルール、マナー）を身につけさせる。	3	2.9	○情報機器の活用について研修会や授業研究を行う。 ○情報機器を生徒が活用する授業について研究する。 ○情報社会の危険やモラルについて継続的な指導をする。	○調べ学習など、情報機器を利用する機会を捉えて、情報社会のルールやマナーについて指導を行い、意識の向上を図った。 ○情報社会に潜む危険や自分の身を守る方法などについては、講演会を通して、生徒に知識を持たせるとともに注意を促すことができた。 ○ネットモラルの講演会では、事前にアンケートを行い、内容についての深い理解を促せた。また、事後指導を計画的に行い、携帯電話・インターネット・ゲームの安全な利用方法について指導することができた。	3.3	○総合学習や道徳などカリキュラムの中に情報社会のルールやマナーについての学習を組み入れ、3年間でまとめた内容を学習させるようにする。 ○生徒の情報活用について、安易な引用ではなく自分の思考を高めるための手段としてインターネット上の情報を活用する指導を行う。
	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	<ul style="list-style-type: none"> ・特に重視している「確かな学力の定着」「思考力・判断力の育成」については、おおむね達成されており評価できます。改善の方策として示されたことが実施されることを期待します。 ・「家庭学習の指導」については、各先生方の評価が低いようです。家庭学習については、生徒一人一人の進路目標達成のためには大切な活動であり、学習者が自発的に学習に取り組めるよう、仕掛けや工夫が必要であると感じます。 ・「ICTの活用」によって、効果的な授業が出来ていると感じます。多様な教育方法に対し、教諭自らが学会へ積極的に参加され、また、国研を有効的に利用されており良好と感じます。今後も継続して研鑽をお願いします。 					

分野・領域	評価項目（取組内容）	22年度 評価	23年度 評価	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	24年度 評価	25年度へ 改善の方策
学 校 運 営	学校組織運営 学校長のリーダーシップのもとに、全教育活動にわたって円滑に、創造的に実施できるよう、能動的な組織体制をめざす。	3	3.1	○必要な組織、そうでない組織を統合してスリム化することで機能的な組織運営を行う。 ○定期的な職員会議の開催と有意義で効率的な運営が必要。 ○重点項目を整理し、ビジョンと連動した重点項目を設定し、教育実践に反映させる。	○企画委員会、研究部会、生徒指導部会など、各部会で定期的に話し合い、効率的に活動ができた。 ○各部会を有機的につなげるところに課題があった。 ○校務分掌での役割分担において職員にやや隔りがあったり、うまく機能していなかったりするところもあった。	2.7	○企画委員会と学年会や各種委員会との連携を強め、能動的な組織体制をつくる。 ○校務分掌を見直し、職員1人ひとりの役割を明確にするとともに、各種委員会を整理し、能率的に動ける組織をつくる。
	学年経営 学年経営の基本方針を明確にし、各教師の力を結集しながら、望ましい生徒集団の育成を図る。	3	3.5	○生徒が自ら考え行動できる集団づくり、一人ひとりの確かな進路実現ができる支援体制をつくる。 ○特別な支援が必要な生徒も集団の中で育ていけるように指導方法を工夫する。 ○学年の教諭と講師の共通理解を図り、講師にも積極的に学年のことに関わるようにする。	○きめ細やかな指導を目指し、生徒についての情報共有を重にするなど、教師間の連携を図れた。 ○学年の教諭と講師の共通理解を図り、積極的に学年のことに関わることもできた。	3.5	○生徒についての情報共有を引き続いて行い、生徒にとってよりよい指導を実践する。 ○教員間の共通理解を深めるため、定期的に会議を持ち、マンネリに陥らないように創造力を発揮した活発な議論を行う。
	学級経営 生徒が前向きに学習したり活動できるよう教室内の学習環境整備に心がけると共に、望ましい人間関係が育まれるよう、学級経営の充実を図る。	4	3.2	○担任ごとの取組ではなく、学年や学校全体の取組として共通理解を図ると共に、隔りのない共通した指導を継続する。 ○学級の中で前向きな発言・行動をひろい、正しく評価していくことで、自立した集団に育てる。 ○清掃活動の徹底を図る。	○学級内で話し合う機会を設けて、生徒主体の学級運営を心がけた。 ○学年の教諭と講師の共通理解を図り、積極的に学年のことに関わることもできた。 ○教室内の環境整備を常に心がけられた。	3.2	○教員が計画を早めに生徒に示し、生徒主体の取組を進める。 ○生徒の発言・行動を正しく評価し、自立した集団に育てるように努める。 ○教員間の共通理解を深めるため、定期的に会議を持ち、活発な議論を行う。 ○清掃活動の徹底を図る。
	保護者との連携 PTA活動や学級懇談等を通じて、保護者との連携を深め、学級及び学校への教育的支援体制を作り上げていく。	4	3.3	○保護者と教員の協力関係を維持しながら、生徒の問題に協力して、対応できるようにしておく。 ○学校の様子を積極的に保護者に伝えるようにするため、ホームページなど広報に力を注ぐ。 ○PTAの部会をとおして、職員と部員の連携を深め、PTA活動を更に充実したものにする。	○各種通信や懇談・電話連絡等を通じて、保護者への情報発信を進んで行えた。	3.2	○学校便りなどを発行し、学校としての目標や指導方針・日常の生徒の様子等を、今以上に積極的に発信し、深い理解を得る。 ○年間を通じてオープンスクールを計画的に実施することで、学校の教育活動への深い理解を得ていく。
	生徒指導（規範意識・態度） 学校や社会でのルールやマナーについて、全職員が共通理解のもとで生徒の規範意識の向上に努める。	3	3.1	○何を徹底させるか、生徒にもわかるように具体的に示し、目に見える取組にする。 ○具体的な指導についても共通理解を図り、生徒の意識を向上させる取組を行う。 ○学年団と生徒指導係の連携を更に密にすることで、生徒一人ひとりへの目くばり、気くばりができるようにする。	○職員会議等を通じて学校生活で身に付けさせたい基本的生活習慣についての共通理解を図ることができた。しかし、具体的な指導方針等において、まだ共通理解が不十分な点がある。 ○教師備が社会規範を教える指導については意識できているが、生徒自らが自分の行動を振り返り、その適否について判断できる力を育むような指導にまでは至っていない。	2.9	○特別活動や生徒会活動等において生徒個々が学校生活を営む上で必要なきまりや授業規律等を考え、話し合い、生活習慣を確立することの必要性を学ばせる。 ○生徒指導部会・職員会議等で教職員間の共通理解を図り、協同して一貫性のある指導を行う。

分野・領域	評価項目（取組内容）	22年度	23年度	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	24年度	25年度へ 改善の方策
		評 価	評 価			評 価	
学 校 運 営	生徒指導（内面的理解・共感） 一人一人の生徒の内面を共感的に理解し、人間的ふれ合いに基づいた指導を継続しながら、信頼関係を築き、生徒間相互の望ましい人間関係の構築に努める。	3	3.3	○生徒の内面を理解するため、生徒との良い関係づくりをするためのキャリアカウンセリングに努める。 ○どのような言葉がけが、対象生徒により働きをするのかを考えて指導する。 ○学び合いや日常の班活動をとおして、望ましい人間関係づくりに努める。	○積極的に生徒とのコミュニケーションを図りながら、生徒との信頼関係を築くことで、共感的な生徒理解に努めることができた。しかし、生徒の悩みを個別に把握する方法が十分に確立されていない点が課題である。	3.0	○指導に関する客観的な情報を資料として残すことで、継続的かつ客観性のある指導を行う。 ○学級や個人の様子を把握するためのアンケートを実施し、予防的・開発的な生徒指導を行う。
	実地教育（教育実習） 学校教育センターや大学の先生方と密に連携を図りながら、専門的な教科指導の実習や本校での教育研究に学ぶ中で、教師に必要な素養を高めていく。	3	2.6	○来年度の実習やリフレクションについて、センターを通じて十分な打合せをする。 ○附属の教員が大学で授業をするなど、大学の教員と附属学校園の教員の教科連携を深める。 ○事後指導をこれからも継続する。 ○実習生が附属学校園に来やすい環境整備を行う。	○大学教員と連携し、教科指導を進められた。 ○附属の教員が大学で授業をするなど、大学の教員と附属学校園の教員の教科連携を深められた。 ○実地教育テキスト改訂作業をとおして、教科の基本的なことを見直すことができた。	3.3	○大学で実地教育と関連する授業を通して、実習の意識を深めさせる。 ○実習生の素養を高めるため、学校教育センターや大学の先生方と密に連携し、情報交換などを行う。
	大学・附属学校園間の連携 附属学校運営委員会での方向性をもとに、大学及び附属学校園間の連携を深め、子どもの発達段階に応じた効果的な教育活動をめざす。	3	3.0	○プロジェクトチームを立てるなど、教科の共同研究を促す方策をとる。 ○幼小中連携や一貫教育を考えた9年間または12年間の連続した指導を検討する。 ○学期に最低1回は相互に授業参観をおこなうなど、具体的な形のある連携をする。	○教科によって、大学教員と連携を深め、資質の向上を図ることができた。 ○教科によって、幼稚園や小学校と連携して授業交流ができた。 ○三附属連携協議会で協議されたことが、あまり実行できなかった。	2.8	○連携する意義やテーマを明確にする。 ○連携を深めるために、より具体的な方策を考えて実践していく。
	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学級運営や学年経営などについては、高い評価になっていますが学校全体としては各先生方の評価は低いようです。改善の方策にもありますが、職員の間で共通理解を図るための工夫がさらに必要と思います。 ・生徒指導に関する2項目で昨年度より点数を下げています。各個人の個別内容を把握し、適切な指導を実施することは非常に難しいことですが、積極的に係わりを持って頂きたいと思えます。また、改善の方策に示されているような取り組みを心掛けて頂きたいと思えます。 ・広範囲からの生徒の受け入れのため、地元との学校と同じ取り組みは難しいと思えますが、おやじの会、PTAと連携し、附属独自の形態を築いて頂きたいと思えます。また、評価点がやや下がった「大学・附属学校園間の連携」について推進されることも有効な方策と思われれます。 ・実地教育に関する項目では、24年度により取り組みがなされたようですので、これを継続して頂きたいと思えます。 					

分野・領域	評価項目(取組内容)	22年度 評価	23年度 評価	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	24年度 評価	25年度へ 改善の方策
研究活動	研究・研修体制の確立 研究・研修体制を確立し、研究授業や職員研究会の充実を図り、各自の研究・研修成果を職員で共有し、資質の向上を図る。	3	2.8	○学校の研究テーマを4月当初に提示し、教科の研究テーマと連携させて組織的に取り組む。 ○「主体的に学ぶ」こととキャリア教育の整合を図り、学校全体としてめざすものを明らかにし、教育課程に反映させる。 ○研究内容を小学校と整合性のあるものにしていったり、協働研究をすすめていく。 ○授業研究を複数回行い、授業のレベルを上げるとともに研究の充実を図る。	○研究授業・職員研究会をとおして、授業研究や研究テーマに沿った研究を進めることができたが、研究内容については、学校全体としての共通理解やより深い議論が必要であった。 ○研修内容について教員間で話し合い、現状で必要な内容を絞り出し、資質を向上させることができた。 ○定期的な研修の実施が大切だと共通理解が深まっている。	3.0	○研究内容について職員間で議論を深め、共通理解を図る。各教科の取組を共有し、研究の質を高め、計画的に研究を進める。 ○研修内容について十分な話し合いを行い、講師依頼、日程などを考え、計画的に実施する。 ○部活指導・研究授業などの日程調整を意図し、時間の確保と教職員全体の参加を図る。
	研究発表 研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。教師が元気になる授業研究会を目指し、公立校のモデル校となる先進的な教育実践をおこなう。	3	3.0	○「主体的な学び」について、理論を確かなものにする。 ○校内研究会・研修会を充実させ、研究発表会までに実践を重ね、内容の充実した実践発表の場にする。 ○研究として取り組んでいることを、保護者や生徒に伝え、理解を得る。	○研究発表会では、これまでの取組を紹介するとともに参加者から意見をいただき、有意義なものとなった。 ○大学から参加者が多く、大学との連携は深まった。一方、一般からの参加者が少なく、本校の研究について、広く知らせる工夫が必要である。	3.3	○本校の研究について、本校ホームページや大学のホームページに載せるなど、広く知らせるための取組を行う。 ○大学との共同研究をさらに深め、院生や共同研究者などと連携した研究を進める。 ○研究内容に沿った講師を招聘し、研究会に参加しやすいように日程調整を行うなど参加者増加を図る。
	指導力の向上 大学の先生方との連携を密にしなが、教師として指導力の向上に努め、全教育活動において一層の充実をめざす。	3	2.8	○今後も研修会・研究会を定期的で開催して、理論を学び、実践をつみ上げていく。 ○学校教育センターをとおして、組織的に連携を深める。 ○定期的に大学の先生から指導をうける機会を設ける。 ○大学との連携を図るため、学校教育センターと協力して、組織的に連携していく。	○各教科の研究を通して大学との連携を深め、教科の指導力を高めることができた。また、職員研究会では、今年の研究テーマに沿った内容で大学の先生に指導を受け、研究内容を深めることができた。 ○研究費を有効に使い、資質向上を図るとともに、指導教員などの充実を図ることができた。	2.8	○各教科での大学との連携と共に、学校としての連携を深める。 ○共同研究など、協働体制を整え日常的に連携をする。 ○研究内容やニーズに合った職員研修を計画的に行い、指導力の向上を図る。
	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	<ul style="list-style-type: none"> 限られた時間のなかで、先生方はよく努力されていると感じます。 国研などを有効活用されて活発に取り組まれていると思います。 研究発表会については、改善の方策にもあるように日程調整を図ることで参加者増につながることを期待します。 					

分野・領域	評価項目（取組内容）	22年度 評価	23年度 評価	24年度へ 改善の方策	24年度取組達成の状況	24年度 評価	25年度へ 改善の方策
安全管理等	健康・安全教育 自分の健康を意識し、食生活の基本を身につけ、自ら健康管理ができる生徒の育成を目指し、保護者や学校医とも連携を図ながら健康教育を推進する。	3	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ○生活習慣アンケートの結果を効果的な保健指導に活かす。 ○栄養教諭の活用を図り、食育の推進に努める。 ○健康で安全な生活について、生徒会活動の面からも取組をすすめ、意識の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○給食指導をとおして、食生活について指導をしているが、食育への取組が十分とは言えない。 ○アルコール消毒、マスクの奨励、風邪の予防など、健康面の指導を行った。 ○心肺蘇生法やAEDの講習を行い、安全を守る方法を身につけることを心がけた。 	2.7	<ul style="list-style-type: none"> ○給食指導を充実させたり、栄養教諭を活用させたりするなど、計画的に食育を推進する。 ○学校生活をとおして健康・安全についての指導を行う。
	防災教育 附属学校園における安全確保及び安全管理の手引に基づいた訓練や学習を実施し、常に防災意識を高めておく。	3	3.0	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の家の防災マニュアルを作るなど、学んだことを実践に移す活動を行う。 ○家庭や地域を含めた防災への啓発活動をする。 ○緊急時の対応や避難所を想定した活動など、具体的な方法を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○防火・防災訓練を2度行い、専門的な知識を学び、意識を高めることができた。 ○概ね防災教育を推進できたが、定期的な訓練以外の防災教育について課題がある。 	2.7	<ul style="list-style-type: none"> ○日頃の教育活動をとおして、子どもたちが災害についての正しい知識と的確な判断力を身につけるように指導する。
	施設・設備 施設・設備の定期点検と拡充を行い、校内の安全を確保すると共に、教育効果を高めていけるよう教育環境の整備に努める。	3	3.1	<ul style="list-style-type: none"> ○定期的に点検を行い安全を確保する。 ○教育活動を行う上で必要なものは優先的に購入・改善をする。 ○教員・保護者の協力で作成・改修できるものは、その方法で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○施設・設備の定期点検はできた。 ○おやじの会の協力で、設備の整備が進んだ。また、活動については学報に記事を掲載できた。 ○概ね物を大切にしている生徒の育成ができた。 	2.9	<ul style="list-style-type: none"> ○引き続き定期的に施設・設備の点検を行う。 ○おやじの会の活動など保護者の協力を生徒に知らせる。 ○物を大切にすることを徹底させる。 ○必要な施設、設備を整えるために、予算編成を行い、附属学校設備備品更新検討ワーキンググループの検討を経て計画的に購入していく。
	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	<ul style="list-style-type: none"> ・各項目とも厳しい評価になっていますが、安全管理はいま公共施設、特に学校において は最優先する課題であると思われます。それぞれの項目の表現において、設置者として専門家による整備や点検を必要とするものと、「おやじの会」にお願いするものなどを分けて記載する方がいいのではないのでしょうか。「おやじの会の協力で、設備の整備が進んだ」等の表現については曖昧な感じを受けます。 ・点数を下げていますが、前年度に立てた改善の方策に対して確実にPDCAサイクルを回していただきたいと思います。 					
全体としての評価について	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの取り組みを積極的に実施されていると思われます。 ・学校経営の方針や学校評価書に示されている「学校経営の方針」「本校の性格と任務」「教育目標」「目指す生徒像」「重点目標」「重点項目」などが、似たような表現でちよつとずつ違うものがそれぞれに示されていて、全体にまとまりや一貫性に欠けるように感じます。そしてそれらとは異なる項目や内容で「自己評価」が行われているために、全体的に統一性に欠け、PDCAサイクルになりにくい全体構成になっているように感じます。 ・特に、重点目標に対する1対1の関係で評価書を記載したり、重点項目VS評価項目をマトリックスにして表すなど、目的に対する結果が見えるように評価書を変えていくなどの工夫をする必要があると思われます。 ・またアンケート調査の項目については、教員、生徒、保護者で質問内容が異なるために、目標や評価項目と照らし合わせたり、三者の比較をすることができない構成となっていますので、アンケートの項目や実施方法に工夫が必要と思われます。 						